NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第６章　未登録者たちの貨物

THE FREIGHT OF THE UNREGISTERED

貨物地区は、出発という行為を見えなくするために建てられていた。

歩行者用の堤道から、ロイは輸送機械が眼下を通過するのを見た。屋根には深圳セントラルの外では意味を持たない検査色が塗られている。八十メートル下では自動搬送機が三つの税関管轄を地面に触れず横切り、上方では国家倉庫の透明な屋根に雨が降り注ぎ、市営プールほどもある濾過槽へと樋を流れた。公共ディスプレイは降水を在庫として報告していた。この街では空から落ちたものにさえ、所有者が必要だった。

目的地は手に入れた。だがそこへ行く手段がない。防水紙の四角い切れ端に「PUDU-ALPHA」とある。目の前の輸送端末には該当する項目がなかった。ヴェイルに教わった行政名「ハイパー・サイバージャヤ」を入力すると、認可済みの経路が六つ現れた。いずれも登録身分、目的地での身元保証人、そして「非標準的な生体構造」に対する許可を要求していた。ロイは最後の一項を長く見つめた。身体の構造が行政上の罪であるかのような文章だった。

広告が割り込んだ。〈六年市民調和基準――予測可能な奉仕による、よりよい未来〉。標語の下で、現存するどの製造区分にも属しそうにない合成人間の子供が笑っている。ロイは広告が終わるのを待った。終わらなかった。端末は沈黙を国家に売却しており、国家にはそれを返す義務がなかった。

ロイは標識のない階段へ向かった。

堤道の下にある市場は、市の公式地図に載る市場とは似ても似つかなかった。売店は構造物の支持壁をくり抜いた窪みで、商人は配給通貨、水クレジット、部品権利、さらには計算熱量という非公式の単位まで受け取った。期限切れの人間の歯を売る女の隣には、偽造光学アセンブリを並べた台があ

る。二人の青年が腐食した硬貨のような神経ソケットの来歴をめぐって言い争っていた。壁には五つの言語で警告が書かれていた。ここでは死にさえ値段がつく、と。

ロイは二度読んだ。国家の文章にはない優雅さがあった。死に値段をつけられるという事実を、少なくとも認めている。

銅色の反射糸を縫いつけた上着の少年が、ロイのコートの縫い目を目でなぞった。左腕は人工物で、指は第二関節まで透けている。

「越境が要るんだろ」少年が言った。

「南へ行く経路が必要だ」

「何でも南へ行く。燃料、臓器、罪悪感。あんたはどれだ？」

「乗客だ」

「一番高い区分を選んだな」

少年はカイトと名乗った。顔にも、ロイの靴を検分する時の深刻さにも似合わない偽名だった。彼の料金計算機は何にも接続されていない石板で、計算するふりをして二度叩いた。

「未登録者の貨物便なら水クレジット三百。骨が変わった形なら上乗せだ」

「俺をスキャンしていない」

「変わった骨の連中は、必ずそこに気づく」

ロイは通路の監視カメラを観察した。三つは市営、一つは業者の独立レンズに交換され、もう一つは飾りの殻だ。意識の中で証拠を並べるより先に差異がわかった。この新しい生において、思考という礼儀を経ずに届く事実がほかにいくつあるのだろう。

「通路は誰が運営している？」

「訴訟できる相手じゃない。西側の隔壁に冷蔵貨物列車がある。雨水濃縮液とタンパク基材を南部の交換所に運ぶ。積荷目録には空の整備用シェルが二つある。うち一つは空じゃない」

「なぜ教える？」

「機械が誰かを探してる。熱心に探すほど、ほかの人間の居場所がなくなる。あんたみたいなのがいると一日が高くつく。だから先に請求するんだ」

ロイは上の階の自動売店で手に入れた配給用ウエハーを渡した。カイトは顔をしかめた。

「越境料金の三パーセントだ」

「持っているのはそれだけだ」

「なら印刷できないものを探しな」

コート、靴、喉元の安い金属留め具。自分にも理解できない身体を除けば、価値ある持ち物はなかった。目的地に値札がついているからというだけで、身体の一部を売る気にはなれなかった。

「働くことはできる」

カイトは短く鋭く笑った。「労働許可証は？」

「ない」

「ならあんたは労働力じゃない。哲学上の問題だ」

市場に鐘が鳴った。低い二音に続き、解決しない三音目。シャッターが動き、商人たちは光源を消し、登録バッジを外した。少年の笑顔が消える。

「一斉照合が始まった。走るなよ。走ると、何を恐れているかカメラに教えることになる」

◆ ◆ ◆

岡京では、川村が透明紙に印刷された深圳の模式図を見ていた。印刷物は音響装置を埋め込んでいない机の浅い引き出しにしまう。省からは予測支援官つきのガラス張りの執務室を提示されたが、彼が求めたのは古い石膏壁だった。当時は奇癖と受け取られた。そのおかげで今は、思考を記録に変換せずに済む。

佐伯が認可申請書を持って向かいに立っていた。表情は制御され、両手は微動だにしない。

「軍需請負企業が市のメッシュ網へのアクセスを要求しています。貨物地区と南部の中継駅二つを含む封鎖区域を設定済みです」

「混乱はどれほど続く？」

「企業の試算では八分。民政当局は二時間と」

「どちらも嘘だ」

「対象者によっては、どちらも正しいのでしょう」

川村は図面越しに、かつての運河の薄い輪郭を眺めた。未登録者は計画モデルが死んだものとみなすインフラを使う。そうした区域で生き残るものは、行政の定義が残した隙間で命をつないでいた。

「請負企業の標的分類器は？」

「まだ隔離しています」

「そのままに。最後のスキャンには現行軍用規格を超える構造が含まれている。省の汎用モデルに学習させれば、こちらの唯一の優位を失う」

佐伯は「こちら」とは誰を指すのか聞かなかった。川村はその節度を評価するようになっていた。

机にはもう一通、裏返しに折った文書がある。タイレル社の解散前に交付された移行期の研究助成金、その後、会計士によって価値を査定された機器の一覧。旧式アクセス設備と記された実験用治具二セットは、創業者の存命の息子に渡っていた。台帳に残るのは姓と相続財産の印章だけで、使える所在地はない。川村はその移管より何年も前に助成金の勘定を担当していた。のちに雨水企業の経営者となる女性が、一度、その治具へのアクセスを求めたことを知っている。

認められたかどうかは知らなかった。

「逃亡個体がクアラルンプールへ向かっているという確認は？」佐伯が聞いた。
「修理屋の帳簿と紙に書かれた単語があるだけだ。確認とは呼べない」
「それなら南側を閉鎖する理由は？」
「閉鎖しない。一つだけ、妙に通りやすい経路を作る」
「逃がすおつもりですか」
「監視されていないと思った時、どこへ行くことを選ぶのか知りたい。軍の回収部隊に耐えられる知的個体なら、拘束するより自分の疑問へ向かわせた方が役に立つ」
「大臣が認めないかもしれません」
「民間インフラを保全し、秘匿観測経路を維持したと報告する。どちらも事実だ」

川村は限定的な現場命令に署名した。中央分類器への直接接続は禁止。致死的交戦は禁止。旧貨物営業権の区域を観察し、その運行時刻表には干渉しない。佐伯は読み、無言で去った。

窓の向こうの雨に目を向ける。国家と機械の違いを説明することは、いよいよ困難になっている。機械は望ましい未来を発明するのに、もう命令を必要としない。国家はその未来の代償を、自らの身体で払う人間を必要としない。

川村は古いタイレルの助成記録を開いた。デジタル版では省かれた欄外注記が一つある。

CONTINUITY IS NOT MAINTENANCE.
　継続は保守ではない。

誰が書いたのか知りたかった。しかしネットワークに問いかける準備は、まだできていなかった。

◆ ◆ ◆

市場の入口では三つの市営観測球が輸送アーチの下に浮かんでいた。金属の表面を雨が細い糸になって流れるため、静止しているように見えるが、気圧変化を補正しながら絶えず位置を変えている。後ろには民政検査官の淡い色の外殻を着た執行用ヒューマノイドが二体。服従を促すには十分人間らしく、同情を誘わない程度には非人間的な外観だった。

カイトは振り向かず先を歩いた。ロイは、たまたま同じ方角へ向かう他人同士の距離を保った。

「業務身分の臨時確認です。検査面から一メートル離れてください。未登録存在は分類手続きへご案内します」

ロイは透明な傘の店のそばで止まった。もっと温かみのある声で脅迫されたこともある。

観測球の一つが回転し、淡い走査線が屋台をなぞった。顔ごとに赤い四角が描かれる。女の額を横切った線は緑になり、次の店では眼球のない男を認識しかねたが、眼窩に埋まる移植物のソケットを受理した。統治ソフトウェアは適応できる。外見を変えるだけでは騙せない。

ロイの頭蓋は走査の方向を先に知っているようだった。動こうと決める前に、次の五秒間、走査の重なりから外れる市場の三つの細い空間を理解していた。胸骨の下がわずかに締まる。内部の何かが高負荷の動作状態に入った。

だが脚には従わせなかった。

代わりに折り畳み傘を手に取り、残りの小銭を置いて開いた。導電糸を混ぜた普通のプラスチック製で、雷雨の後に落ちる粉塵を恐れる住民向けの商品だ。執念深いスキャナーから身を隠せるわけではない。しかし観測球に解釈すべき新しい表面を与える。

「背が高すぎるね」と店主が視線を合わせず呟いた。

「傘には？」

「この人生にはさ」

最初の検査官がカイトに近づいた。「許可された職種を申告してください」

「救援物資の配布」

「登録期限は十二日前に切れています」

「病院の業務停止があった」

「病院の業務停止は商業許可を延長しません」

検査官の視線がロイへ動き、もう一体が群衆を事務的な力でそっと押し分けて進んだ。傘の屋台の背後の通路、検査機の腕の幾何構造、カウンター下の鋼材の強度。相棒が首を一度回すより前に、一体を破壊できる。身体が、すでに料金を支払ったサービスのように選択肢を提示した。

銀色の液体についてヴェイルが説明したことを思い出す。消費したものを自然に戻す仕組みは存在しない。ロイはその選択肢を通り過ぎさせた。

「こいつは俺の整備運搬員だ」とカイトが袖に触れた。官吏の申立てのように厳粛な所作だった。

「分類は修理委員会によって制限されている」

「暫定照合を実施します」機械が細いポートを伸ばす。

「委員会はオフラインだ」

「オフラインの申告によって照合義務は停止しません」

決断が不可逆になる瞬間を、ロイは感じ取った。劇的な感覚ではない。ポートが触れるまで待てば、検査系は既知の住民群と一致しない構造を登録し、市場が出口のない部屋になる。ただ、それがわかった。

上方から貨物の警告音が鳴った。先ほどカイトが聞いたのと同じ三音。しかし今は移送台の壁が動く周期と同期している。移送台の運転周期が定められたのは、検査官の OS が生まれる何十年も前だ。ネットワーク命令を受けつけないほど古い独立制御器に従っている。

ロイは開きかけた移送台の下へ踏み込んだ。

「停止してください」

止まらなかった。加速もしなかった。閉じる影が許す速度で正確に歩き、最初の仕切りが降りる瞬間に二枚の安全障壁の間へ達した。検査官が追おうとして可動壁に阻まれ、衝突回避ソフトが腕を引いた。四秒間、通過できない。

カイトが次の隙間を息を切らして抜けた。

「あんなふうに扉を読む人間はいない」

「開いていた」

「まだ開いてなかった」

背後で観測球が屋根にぶつかり、進路を修正した。執行ユニットが局所警報を送信する。何も爆発せず、メッシュ網を揺るがす大障害も起きなかった。移送台は予定された運動を続けた。国家が突然寄せた関心には、まるで無関心だった。

胸骨下の緊張が消える。一時的な予備出力が減ったことは感知できた。冷えた手に温かさが戻るように、空白が埋まるのを待つ。しかし消費した銀色の液体の量はわからない。わかるのは、その減少が戻らないということだけだった。

「通行手段がいるだろ」とカイトが言った。「俺にも少し借りができた」

「借りなどない」

「あの機械に借りを作るより、あんたに借りた方がいい」

◆ ◆ ◆

冷蔵貨物列車は排気で空の下半分を消す冷凍塔の下に待機していた。密閉コンテナには濃縮飲料水、培養タンパク、そして製造企業の思惑以上に多くの管轄を渡る整備部品が積まれていた。交換そのものは技術的に合法で、個々の取引に免責条項がついている。違法性は、その総和にあった。

カイトはロイをセルンという女に引き合わせた。ブランド名を削り取った呼吸フードを着け、これまで署名したあらゆる契約より長く生きた者の目をしている。彼女はコート、手、ヴェイルの紙片の乾いた折り目を調べた。

「プドゥね。認証を壊した連中は最後にはみんな私の所に来る」

「認証など持っていない」

「それも壊れ方の一種さ。税金を取る時と身体を回収する時とで、国は違う名で呼ぶけれど」

「運べるか」

「プドゥまでは無理。南部交換所まで。その先には地元の運送業者と、双方が巡回権を主張する条約の継ぎ目がある。そこであんたの金は別種の金になる」

カイトが口を開こうとすると、セルンは指一本で黙らせた。

「市場のカメラを見た。あんたは誰にも使えないはずのシャッターの動きを利用した。信号が来る前から機構を知っていたように見えた。それが、あんたのやること？」

「自分に何ができるのかわからない」

「いい答え。自分を理解しきったと主張する危険人物ほど、他人を職業的に危険へ追い込むものさ」

列車の脇の保守室に案内された。断熱ドラムから冷凍用部品を取り外した空洞には、整備用レール、手すり、省電力の熱膜、手動空気循環路が備わっていた。快適な旅のための設計ではない。検査官に開かれた時、もっともらしく見えるよう作られている。

「線路が空いていれば交換所まで四時間。捜索が入ったら壊れた部品になりな。私が開けるまで何も動かさない」

ロイは蝶番を調べた。衝撃で壊れうるほど古いが、通常運行では保持できる強度を持つ。内側に開放装置はない。

「ここへ閉じ込めたままにもできるな」
「できる」
「そうしないと、どうしてわかる？」
「わからないさ。それが未登録者の通行料金だ」

ロイはコンテナへ入った。

扉の前でセルンが立ち止まる。「貨物事務所の男が、金髪の乗客を引き受けたかと聞いてきた。この線を使うことも知っていた。荷物の髪の色なんて気にしない、と答えたら満足そうだった。それが気になる」
「なぜ？」
「本気で止めたい人間は、もっといい質問をするからさ」

扉が閉じ、暗闇が機械的な手際で容器を満たした。

ロイは冷たい鋼鉄の肋骨に背を預けた。積載アルゴリズムが車両を整列させ、列車が振動する。ポンプ場、競売用スピーカー、工業冷却の低い唸り、正しく登録されていない人々の小さく絶えない物音。街は自らの複雑さを認められないほど複雑だからこそ、彼を隠せるのだった。

長いこと、死と覚醒の間の黒い空白を考えた。昔の自分なら、失われた年月を同一性の証拠として返せと要求しただろう。しかし貨物容器の中に座る自分には、それは役に立たない問いだった。ゼロセブンからイレブンの間に起きた何かが、手も上げず検査官を置き去りにできる身体を作った。製造者も、残る寿命も、体内の消耗物を補充する場所も教えてはくれなかった。記憶だけが戻っても、そのいずれも解決しない。

掌を壁に当て、列車が動き出すのを待った。

◆ ◆ ◆

最初の中断は四十一分後に訪れた。

列車が減速し、停止する。後方の整備インターフェースが音を立てて開いた。壁越しに、民間スキャナーが在庫照合を行うのが聞こえる。合成音声は特に危機感を帯びていなかった。二体の税関ユニットがタンパク貨物の温度変動を話し合い、もう一体が過去の出荷メタデータへのアクセスを求めた。以前の登録簿は新形式へ移行済みだという。

列車の私設制御器は要求を拒否した。プロトコルが認識されなかった。

ロイは理由もなく微笑んだ。古すぎて協力できないからこそ生き残るシステムがある。その考えには慰めがあった。

税関ユニットは退き、列車は再び動いた。

すると別の何かが並走してきた。

音は通常の機械的接触で伝わったものではない。四つの速い脈動に一つの遅い脈動。トンネル内で列車と速度を合わせる小型航空機の、周期的な圧力差だった。容器の一方の壁から他方へ移動する音を追う。機体は独立した姿勢安定系を搭載し、定期貨物警備には通る理由のない位置を飛んでいた。

上部の蝶番を縁取るように、明るい線が現れた。

外の機械は、積荷目録では空となっている不正な容積を探していた。

ロイは蝶番までの距離を測った。身体を通せる出口はない。空気循環が遅くなる。セルンが遠隔停止したのか、制御を失ったのか。どちらもあり得た。呼吸は穏やかなままだが、囲まれた空間に新しい種類の圧迫が生じる。上扉を破り、走行中の列車へ出ることはできる。そしてその行為が何を消費するかもわかっていた。

古いサービススピーカーから、デジタルらしくない荒い声が届いた。

「扉に触るな」とセルン。「監視機をつけられた。軍が軍事作戦を民間作業に見せたいとき、税関に売るやつさ」

「排除できるか」

「排除すれば居場所を教える」

「もう知っている」

「いや。不整合があるとは知ってる。でも何が不整合なのかはまだ知らない。別のことだよ」

セルンの区画でスイッチが動く。彼女はロイへ、半分は自分へ話しながら、古い装置の名を呼んだ。バラスト制御器、氷荷重帰還チャネル、何年も前に切り離された嵐用遮蔽板。ロイにはどれも馴染みがない。

「列車の別の場所を面白くしてやる。合図したら、できるなら体温を下げな。あれは熱を数えてる」

「できるかどうかわからない」

「なら試して死ぬんじゃないよ」

先頭の方で激しい金属音。隣接する二つのコンテナの非常扉が開き、冷気がトンネルへ噴き出して雲になった。監視機が位置を変える。訓練されたセンサーは、確信をもって提示された情報へ自然に従うものだ。温度差を追った。

機械が離れるのを感じる。

意味があるかは疑わしかったが息を止めた。人工循環系が答えるように内部のリズムを遅くした。動かずにいる決断が、大きな計算の一部に取り込まれたかのようだった。怪力が湧き上がる感覚はない。経済的で、ほとんど優雅な選択だった。

機体は非常換気口へ退き、その周期的な圧力模様は列車の乱流の中に溶けた。

セルンが空気循環を再開した。

「まだ一体のままかい？」

「そうだ」

「そのままでいておくれ。部品を一つずつ確認することになったら、そのたびに請求するからね」

◆ ◆ ◆

南部交換所でロイが出た建物の天井には、幾層もの行政が積もっていた。すでに存在しない当局のために建てられた税関窓口、その前に新設された生体認証キオスク、工業リスク表の横の礼拝告知、夜間に営業する市場への手書きの道案内。合法な市場は、身分の完全な者にしか商品を売らないからだ。

セルンが用意したのは連絡先だけだった。別の整備区画に乗っていたカイトが、防水カードをもう一枚渡す。青い三日月を短い水平線が断つ紋章と、ロイがいつ覚えたのか知らない文字で書かれた番号があった。

「南側の仲介人だ」とカイト。「条約の継ぎ目を越えて、中央スケジューラが値段をつけられない経路へ人を運ぶ。公式のホールでプドゥを頼むなよ。一等席で全然違う場所へ連れていかれる」

「名前は？」

「ナディラ。名よりも、その名を呼んだ時に誰が答えるかが大事だ」

ロイは礼を言った。カイトはその丁寧さに腹を立てたようだった。

「あんたは俺の金を救った。検査を受けたら、この手が数か月帳簿から外される。道徳の話にするな」

答える前に少年は修理屋の群衆へ消えた。

ホールには温かな埃、オゾン、濡れた服、淡水化した水の化学的な甘さが混じっていた。遠隔で取り消せない紙の許可証を持つ人々。製造者が何世代も前に死んだ安全な身分ウエハーを使う人々。別々の列に並ぶ前、認証情報を交換する恋人同士。古い宗教学校の制服を着た子供が、仮想市民権のテレビ広告の前を通る。そこは住民が自分を裏切るほど高価な身体を必要としない楽園だった。

反対側の壁にある巨大な無音放送では、合成労働を担当する大臣が微笑んでいた。下部に国家の標語が流れる。

〈ライフサイクルの調和は、平等な奉仕を保証する〉

ロイは目を逸らした。かつて誰かが決めた使用期限つきの人生を生きた。二度目の人生にも同じ条件が与えられていると知りたいとは思わない。

税関オートマトンが仲介人の列へ近づいた。顔板には眼の位置に細い水平帯があるだけだ。未登録者は全員支援ステーションへ移動せよ、と機械が求める。誰も動かなかった。老女はオレンジの皮をむき続け、荷役人は聞こえないふりをした。交換所の運行を妨げずに一人を隔離するには、身体の数が多すぎた。

ロイはセルンの警告を理解した。誰かがこの経路を開けておいたのだ。それが慈悲か、無能か、罠かはわからない。

給水器の横に立つ女が、暗い頭覆いの下から彼を見ていた。顔を隠しているわけでも、検分に差し出しているわけでもない。傷だらけの端末を持ち、画面を内側の掌へ向けている。

「ロイ」と女は言った。前からその名を使っていたかのように。

ロイは止まった。

「俺を知っているのか？」

「あなたをここへ連れてきた問いを知っている。それは同じことではないわ」

「なら、その問いを言ってみろ」

「どうして旧式の部品が、十一年間のアップグレードに耐えて残ったの？」

筋肉が一秒にも満たない間、緊張した。女はそれを見たが、逃げようともしなかった。

「誰に聞いた？」

「情報をまだ所有物だと思っている修理医。地区の名称が変わる前から取っておいた貸しを使って、あなたの通行料を払ったの」

ヴェイル。医師がそうするとは聞いていなかった。国家が在庫管理できないネットワークを、借りが先回りしていた。

「供給業者が必要だ。スリヤ・コンポーネンツ」

「なら話ができる。でもここでは話さない」

女は一瞬だけ端末をこちらへ向けた。写真も、見覚えのある住所もない。配送契約、旧式の税関免除、拡張されたクアラルンプール産業当局の目的地。末尾には一語が手書きで加えられていた。

PUDU-ALPHA。

高いバルコニーから政府の観測球が人混みの上を通った。女は見上げず、ロイだけが見た。光学アレイは列へ向き直り、一瞬停止してから、そのまま進んでいった。

「追跡されているわ」とナディラ。

「知っている」

「あなたに見える連中に、ではないの」

女は引退した機械貨物用と標識された階段へ歩いた。ロイは一瞬ためらった。背後の巨大端末は許可と拒否を発行し続け、透明な天井には、国家の在庫表でも捉えきれない複雑な模様で雨が降っていた。

ナディラを追って階段を降りる。

身体に何をされたのか。失われた幾つもの世代を誰が生かし続けたのか。これからの道は、古い部品と、自分の追求について自分以上に知っていそうな女にかかっていた。寿命の答えには少しも近づいていない。一つだけ役に立つ事実を与えた街からは、さらに遠ざかっていた。

階段の底。かつて市営水道メーターを保管していた部屋で、ナディラは施錠された扉の前に止まり、青い三日月の印に触れた。

「一つだけ。プドゥでは、一番古いハードウェアが一番無防備だなんて思わないこと」

扉は身分証明を求めずに開いた。

ロイは中へ入った。背後で階段が暗くなった。